熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2025.3.3
第 276号
発行 入試・広報課

感染症への取り組み

理事長室から

木下 統晴

漢方の『黄帝内経（こうていだいけい）』は紀元前200年頃に書かれた世界最古の医学書です。その中には殆どの病気は漢方で治せる。しかし、感染症だけは難しいと書いてあるそうです。人類の長い感染症との戦いの中で、治療薬としてフレミングのペニシリン、予防薬はジェンナーの痘瘡ワクチンと、武器を少しずつ獲得してきました。しかし、感染症の奥は深く2019年末から発生した新型コロナウイルス感染症はパンデミックを発生させました。

PCRの分析が一気に国内で普及したことは記憶に新しいと思いますが、その時に活躍されたのは当時の国立感染症研究所病原体ゲノム解析研究センター長で、昨年４月に本学の教授に就任いただいた黒田誠先生です。また、もう一人本学には国立感染症研究所の元室長、化血研共同研究講座特命教授の高橋元秀教授がいらっしゃいます。高橋先生は破傷風菌等で素晴らしい研究をなされ、坂本特命講師、志多田特命助教など講座で良い仕事をなさっています。私は、これらの先生は感染症では日本のトップクラスの方々だと思っています。

２月12日に高橋先生が開催されたワクチンセミナー「これからのワクチン施策」は、日本のワクチン接種の問題やKMバイオロジクスが製造したモンキーポックス（猿痘）ワクチン（１回接種で乳幼児からすべての年齢層の方で使用できる乾燥細胞培養生ワクチン）がテーマとなりました。日本政府はこのワクチン製剤を感染が広がるコンゴ民主共和国へ無償供与しました。熊本は血清療法の開発者北里柴三郎先生はじめ、天然痘根絶の蟻田功先生、世界初のエイズ治療薬の開発者である満屋裕明先生（本学の特別招聘教授で、青木先生の恩師）など、感染症に関するパイオニア、リーダーを輩出しています。そして、包括連携協定を結んだ国内有数のワクチンメーカーKMバイオロジクス株式会社は熊本にあります。

本学は、化血研が1959年に日本最初の６つの衛生検査師養成所の一つとして開学しました。この伝統を大事にし、感染症や微生物分野で社会に貢献していく大学として更に高みを目指したいと思っています。

アカデミックスキル支援センターのスタッフを激励する筆者（写真と本文は関係ありません）

アカハラ防止に向け研修会　九州大対策推進室の神野氏が講演

キャンパス・アカデミックハラスメント防止研修が２月20日（木）、1300L講義室で開催され、九州大学ハラスメント対策推進室の神野文氏が、大学内で起こりうる様々なハラスメントについて講演しました。

神野氏は、大学には学生と教員というほかの業界にはない独特な関係性があることを踏まえ、過去に報道された他大学でのハラスメント例を紹介。ハラスメントが被害者・加害者、そしてその周囲や企業・法人など多くの人に影響が及ぶこと、時代や文化、風土などが変わればハラスメントの判断基準も変化することなどを説明しました。そのうえで、常に相手の人権を尊重し、ハラスメントの知識を積極的に得ること、自分のやっていることが相手にどのように受け取られるか想像することなど、自分が加害者にならないための具体策を挙げました。

研修は会場だけでなくZoomを通しても行われました。参加者から「大学による就職のハラスメントの具体例」についての質問が上がると、神野氏は「就職活動の制限を設けること」や「推薦枠で進路が決まった学生に対して、辞退すると卒業を認めない」といった学生に不利益を与えることがハラスメントにあたると答えていました。

（NL編集部）

「合格」の2文字胸に〝決戦〟の地へ

国試点描

試験当日、会場で円陣を組んで気合を入れる言語聴覚学専攻の学生たち

作業療法士試験を翌日に控え、壮行会に臨んだ生活機能療法学専攻の学生たち

教え子たちの健闘を祈る手作り「合格」バッグを手に見送る教職員の姿もありました

「エイエイオー！」。医学検査学科の壮行会で気合を入れ、いざ会場地へ

教職員らの激励を受けながらバスに向かう看護学科の学生たち

２月13日（木）の助産師試験を皮切りに、国家試験がスタートしました。

学生たちは試験前日、貸し切りバスに乗って試験会場地へ。出発前のキャンパス前では、「大漁得点」などと書かれた旗を掲げた教職員らが手を振って見送るなど、いつもながらの光景が繰り広げられました。

同18日（火）には、臨床検査技師の試験を翌日に控えた医学検査学科の学生たちが1300L講義室に集合。受験票とスケジュール表が置かれた机の上に、メッセージ付きのキットカットを見つけ、うれしそうに手に取っていました。出発前には教員たちと一緒に「エイエイオー」と鬨の声。大一番に向けて気合を入れ、友人たちとともにバスに乗り込みました。バスの外には「ガンバ」と書かれた傘を掲げた教員たちの姿もあり、学生たちはたくさんの人たちの「頑張って」の思いを胸に、決戦の場へと向かいました。

合格発表は、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士が３月21日（金）、助産師、保健師、看護師が同24日（月）、言語聴覚士が同26日（水）に行われます。（NL編集部）

会場地へと向かう前に、「大漁得点」旗を手に記念撮影する理学療法学専攻の学生たち

久保下 亮准教授（リハビリテーション学科理学療法学専攻）

車いすテニスQUAD日本代表に帯同　エクアドルへ

貴重な経験　高地順化と長距離移動

表彰式後のQUADクラス日本代表チーム

２月17～21日にエクアドル・クエンカで開催された「2025 BNP Paribas World Team Cup 予選大会」に、車いすテニスQUADクラス日本代表のトレーナーとして帯同しました。今回は、大会会場が標高2560mと高地のため、直前の同９～13日にかけて国立スポーツ科学センター(JISS)の低酸素トレーニング室でのフィジカルトレーニングや低酸素室に宿泊して高地順化を目的とした事前合宿も実施しました。事前合宿から本大会にかけて、各選手およびスタッフの体調管理を徹底し、より良いパフォーマンスが発揮できるように尽力しました。

試合結果は惜しくもQUADクラス２位でした。今回は、悔しい結果となりましたが、高地環境での試合や高地順化に向けての準備など、普段のトレーナー活動では得られない多くことを経験できました。また、エクアドルまで長い飛行時間となるため、各選手の褥瘡対策なども意識したトレーナー活動となりました。

この大会での貴重な経験は今後の教育に生かしていきたいと思います。

Amazon連携機能の導入事例を発表

情報交換イベントで平緒事務局次長

１月31日（金）、青山学院大学（東京）で開催された「JAB-DAI（Japan Amazon Business-Daigaku）」において、本学の平緒泰弘事務局次長が、本学が取り組む会計システムのAmazon連携機能の導入についてプレゼンを行いました。

「JAB-DAI」は、Amazonビジネスを活用する大学・学校法人のための情報交換イベントです。今回のテーマは「システム連携によるペーパーレス化＆Amazon協業の未来」で、本学のほか、青山学院大学、立命館大学の３校が事例を発表しました。

全国から約100人の大学職員が参加し、発表後には「業務効率化のプロセスが非常にスピーディーで参考になった」との声が聞かれました。交流会では、他大学の発注・検収の現状や運用課題について意見を交わし、実践的な情報交換ができました。大学の規模を問わず、発注リードタイムの短縮、ペーパーレス化、検収の最適化、教職員や部署との調整といった課題は共通していることが改めて明らかになりました。

また、青山学院大学の検収センターや図書館を見学し、検収や物品管理の運用・課題について学ぶ機会を得ました。これらの知見を活かし、本学購買発注業務のさらなる業務改善に向けて取り組んでまいります。

（総務課　中松洋子）

プレゼンテーションに立つ平緒事務局次長

キャンパステラス発

松岡　詠子

コロシアム

キャンパステラスにはコロシアムがある。古代ローマの円形闘技場のような形態だ。正面にはどこからでも注視できる大型モニターが配置されている。ここは、「研究発表」「留学体験報告会」「研修会」「私の部屋でランチを」「サイエンスカフェ」「イノベーションクラブ」等、あらゆる学生、教員、職員の発信と協同学習の場。熱い討論だけでなく、拍手、笑顔も交じり合う知的な交流の場ともなっている。

正面の大型モニターに今日の内容が映された。発表者の〝闘い〟が始まる。ギリリッとマイクを握り締める登壇者。緊張が音となって聞こえてきそうだ。張り詰めた空気の中で発表がスタート。しかし、時間が進むにつれ、新たなアイデア、切り口、活用法などが発表者と聴講者との間で共有されていく。

コロシアムは全ての参加者が価値を共有する場。今日も緊張の一幕がスタートした。そして静かに知識や経験、技術などの貴重でアカデミックな戦いと交流が繰り広げられていく。

週間行事予定（３月４日～３月10日）	
３/４（火）	FDセミナー
３/５（水）	安全運転講習
３/７（金）	共通テスト利用選抜 後期
３/７（金）	第2回情報セキュリティ研修会
３/８（土）	久しぶり、元気かい（会）
３/９（日）	大規模避難訓練